

愛&ノハート

2024 July

271号

◆環境変化への準備

令和6年度報酬改定と今後の展望

◆愛の家

- 疑問・探求心をもって業務を行うことの大切さ
- 障がい者グループホームの近年の動向
- 食事委員会の取り組みについて

◆あいハート須磨

- 利用者様、ご家族の選択に携わる
- BCP研修の実施

◆あいハート離宮前

- 日々のケアの向上を目指して

◆脳梗塞リハビリステーション神戸須磨

120分リハビリダイジェスト映像
～Instagramリール動画で多数投稿～

あいハート
離宮前
利用者さん



環境変化への準備

令和6年度報酬改定と今後の展望

副理事長 森本 光弘

今年は、3年ごとに実施される介護報酬と障害福祉サービス等報酬の改定年度です。報酬改定の内容は、当法人の各種事業（脳梗塞リハビリと有料老人ホーム事業の一部を除く）の収支や運営方針に大きく影響を及ぼすため、毎回、タイムリーな情報収集に努め、より精度の高い予算反映や運営方針の検討を目指しているところです。今回の改定で全体※として介護報酬は1.59%（介護職員の処遇改善分0.98%含む）、障害福祉サービス等報酬は1.12%のプラス改定となりました。但し、これは人件費や物価の上昇を考慮した結果であり、単純に利益が増加するとは言えないというのが実態です。

報酬改定は、介護事業や障害福祉事業それぞれの課題解決や目指すべき姿の追求に基づいてなされますが、特に今回の改定では施設入所者（障害者）に対する地域移行の促進に大きく動き出したということが一番の印象です。これは、障害者権利条約の履行状況に関する審査で「障害児・障害者の施設収容を廃止するための措置」を要請されたことが大きいと思われるが、入所施設の定

員削減のインセンティブとして新たな加算が設けられたことに加え、地域移行に関する意向確認や個別支援計画の作成などが義務化されました。また、施設入所者の地域移行については、第6期障害福祉計画（令和3年～令和5年）において、地域生活移行者数（6%以上）、施設入所者削減数（1.6%以上）といった目標が設定されていましたが、次期計画では施設入所者削減数が6%以上に引き上げられるなど、これまでとは異なるレベルで取り組みが展開されることも想定されます。

当法人において、この問題の対象事業は、愛の家の「施設入所支援（かがやき）」が該当しますが、具体的な対策となるとグループホーム（以下、GH）事業の課題になります。GH事業については、昨年度、「本部重点事業」として位置づけ、約一年かけて事業戦略を検討し、事業動向や課題、今後の目標等について、法人内の合意形成を図りました。施設入所者の地域移行に関しては、「重度利用者受入れの実現（対応力強化）」を目標に、①世話人スキルの向上と②重度利用者に特化したGHの建築に取り組むこととしました。

現状のGHは、一般の戸建て住宅であり、「利用者の地域生活」という面では理想的な状態にあると思います。しかしながら、強度行動障害のある重度利用者にとっては、必ずしも快適な住空間とは言えない「建物の構造的な問題」もあるため、視覚刺激や聴覚刺激を減らすための建築的工夫を

施した建物（重度利用者に特化したGH）が必要であると考えています。

GHで重度利用者を対応することについては、現実的には難しいという認識を持っている職員は少なくないと思いますので、事業戦略に基づいた各種施策を通じて成功体験を重ねることで、職員の既成概念の変化を促したいと考えています。認識の変化は、短期間に実現できることではないため、中長期的な視点を持って継続的に取り組んでいく予定です。

法人や施設を健全に維持・発展させるためには、環境変化への適応が不可欠です。事業動向やニーズの変化に対する情報感度を高めつつ、設定した目標の実現に向けて取り組みを進めたいと思います。

※介護保険事業や障害福祉サービス事業全体の平均値であり、各法人の事業構成によって異なる。



愛の家

疑問・探求心をもって 業務を行うことの大切さ

◆かがやきスタッフ 七野 和人

私は、愛の家に務める前は、保育士をしていました。毎日子ども達と関わっているなかで、学ぶことが多々ありました。

ある日、「なんで、てんとう虫は小さいん？」と聞かれました。今までに疑問を持つことがなかったので、答えることができず「なんで、そういうふう思ったの？」と尋ねると「てんとう虫って、体小さいやん。僕たちに踏まれたりするん。やったら体大きい方が絶対いいやん！」と言ってい



ました。私は、小さくて当たり前だと思っていたので、その疑問を持つことはありませんでした。子ども達の色々な疑問を持ちながら成長していく様子を見て、自身も子ども頃に疑問を持っていたことが大人になるにつれて固定観念が根付いてしまっていることに気づかせてくれました。

その後、愛の家で働くようになってからも色々な発見がありました。

利用者さん一人ひとり、聞こえている音に違いがあることに気づきました。私にとっては、普段の生活音のひとつであったとしても、ある利用者さんにとってはストレスを感じてしまうことに驚きを感じたことを今でも覚えて

ています。

そして、その方たちの気持ちを理解するためにも、「なぜその音が気になるのだろうか？」と考えようになり、既成概念にとらわれるのではなく私が感じている物事は、ある人にとっては良いことであっても、ある人にとっては良くないことと感ずるようになります。

保育士のときに出会った子どもたちが気づかせてくれた「当たり前」に対しての疑問を持つ、という視点を持って支援を行った結果、ある利用者さんに対する音の刺激を最小限にする方法をチームとして考え、解決に向かうことができました。

この9年間という長いようで短いとも感じられる期間のなか、とても貴重な経験を得ることができました。この先も色々な視点や考え方、当たり前と感ずるようなことに対して疑問を持ち、日々精進しながら支援を行っていききたいと思います。

障がい者グループホームの 近年の動向

◆グループホーム主任 山口 真吾

障がい者グループホームは、障がいを持つ方々が、地域社会の中で自立した生活を送るための重要な支援施設です。近年、障がい者福祉政策の進展とともにグループホームの役割や運営方法にも大きな変化が見られます。

まず障害者グループホームの数は増加傾向にあります。これは障





がいの地域の生活への移行を推進する国の政策や、地域社会の理解と支援の向上が背景に

あります。

2013年の障害者総合支援法の施行以降、地域での生活を支えるための支援体制が強化され、グループホームへの需要も高まってきました。また運営面でも多様化が進みました。従来の福祉施設型のグループホームに加え小規模で家庭的な雰囲気を持つホームや、24時間の支援が提供されるものなど、利用者のニーズに応じた様々な形態が登場しました。これにより個々の障がい者が、より自分らしい生活を実現できるようになってきました。さらにグループホームの支援内容も充実してきました。生活支援に加え、就労支援や健康管理、地域交流の機会提供など包括的なサポートが行われるようになりました。

その一方で当然課題も存在します。人手不足や、職員・世話人の専門性の向上が求められている点です。これは全国的に解決が求められる課題だと思えます。また地域差によるサービスの質のばらつきも課題のひとつとしてあると感じています。それに対して各自治体や法人は、地域自立支援協議会の取り組みや研修制度を充実させたり、他施設との連携強化を図ったりするなど対応を進めています。

このように近年の障がい者グループホームは多様化と充実を図りつつ、民間企業が参入した新規開設など、さまざまな動きが見られます。今後は地域社会と連携した支援体制の強化がより重要となっています。今後もその動向に注目し、障がい者福祉のさらなる向上を目指して行きたいと思えます。

食事委員会の取り組みについて

◆事務主任 森口威

愛の家事務の森口です。私たち事務員はいつも笑顔の窓口対応

を心掛けながら、間接的な施設支援の役割を担い日々の業務に取り組んでいます。

その中で、私は愛の家で実施している委員会のひとつである食事委員会の座長をさせていただいていますので、食事委員会の取り組みをご紹介します。

この委員会は給食委託会社の日清医療食品の社員、各部署の職員、看護師、事務員が利用者さんの食事に関わる全てを検討していく多職種連携の委員会です。

毎月1回行われる給食委員会では各部署から食事に関する相談、報告、食事量の増減に関すること、利用者さん個々の食事の観点から見た健康に対する看護師の見解、次月献立表の確認などを協議しております。責任もありませんが、利用者さんの食事に携わりやりがいのある委員会でもあります。

その中で年2回、利用者さん、職員を対象に行う食事に関するアンケートも委員会として実施しており、アンケート内容は提供している食事の味付けや見た目、量、好きなもの、苦手なものやアレルギーメニューなどです。

アンケートを集計すると好きなもの苦手なものは子どもも大人もだいたい同じだったりします。

またリクエストメニューについては、ステーキやラーメン、カレーなどの定番のほかにはたこやき、鯛の握り寿司やマクドナルドのハンバーガーといったユニークな回答もありました。

普段はカロリーや栄養価が計



算された食事提供を行っていましたが、たまにはマクドナルドのハンバーガーを皆で食べたり、可能な範囲でリクエストメニューを取り入れたりすることも楽しくていいのかなと思います。

これからも多職種で連携しながら利用者さんへ「よりよい食事」の提供ができるよう「なんちゃって栄養士（資格はないけれど）」として取り組んでいきたいと思えます。

あいハート須磨

利用者様、ご家族の選択に携わる

◆居宅介護支援事業所

部門長代理 橋本 裕弥

私はケアマネジャーとしてあいハート須磨に入職して間もなく6年になります。

当初ケアマネジャーの一番の役割は利用者様、ご家族に「困りごと」をお聞きし、介護保険サービスを活用すること、事業所と繋

げることであると思っていました。間違

いではないと思うのですが、当時は介護保険サービ

スありきで提案し、失敗をした経験もいくつもありました。

最近では考えが少しずつ変わり利用者様、ご家族に携わりながら「選択」を見届け、必要時には別の「選択肢」もあることを伝えることが役割かと思うようになりました。

その中でも最近携わっていた在宅看取りを選択された、がんの終末期の利用者様のことが印象的でした。まず残り少ない時間をどこで過ごすかという「選択」をされたのちに自宅で過ごされていきました。その中でご家族が泊まり込みで代わる代わる介護をされており「出来る限り自分たちで頑張ります」とお話されており自分たちで介護をするという「選択」をされています。

また、さらに時間が経過するに



つれて痛みが強くなり薬の使用をするか否かという「選択」を迫られていました。医師からはその薬については、痛みは緩和できるが意識が乏しくなり今後の期間が短くなると伝えられており使用するか否かの「選択」は利用者様、ご家族にとっては究極の「選択」だったのではないかと想像できます。

結果としては痛みを少しでも取ってあげたいと思われ薬を使用し、その後数日で亡くなりました。最期は「眠るように逝きました」とお聞きしており、残された時間は昔話などをして過ごされたようです。

当たり前ですが人生観や価値観、置かれている環境が利用者様、ご家族ごとに異なります。考えが違う利用者様に携わるのは苦勞する点ですが、置かれている課題や背景を理解、共有しながら利用者様、ご家族、サービス事業所と一緒に携わるケアマネジャーでありたいと思えます。

BCP研修の実施

◆事業推進担当主任 黒木 涼太

6月13日、19日、25日の3日間に分け、BCP研修を全職員対象に実施しました。まずBCPとは、「Business Continuity Plan」の略称です。日本語では業務（事業）継続計画と訳されます。



大地震や水害などの自然災害の発生や、新型コロナウイルスなどの感染症が発生すると、普段のよりに業務を実施することが難しくなります。

BCPとは万が一災害などが起こった際にも業務を中断させないための準備をしておくとともに、もし業務が中断したときにもできるだけ早急に、優先すべき業務から復旧していくための手順や体制などをあらかじめ策定しておく計画を指します。介護保険制度の改正により、介護施設においては計画の策定だけではなく、年に2回の研修、訓練の実施が義務化されました。計画策定や研修等を実施していない場合には介護報酬が減算されるため、その重大さが伺えます。

今回は第1回目の研修ということで、まずは職員にBCPの基本を学習してもらうため、2つの動画コンテンツ「介護BCPとは何か」、「地震による災害と備え」を用いて実施しました。動画の最後には、視聴した内容がどのくらい理解できたかを振り返るた

めに、理解度テストを実施してもらい、その提出をもつて研修報告としました。



地震等の災害が発生した際の備蓄の考え方として、災害道路状況等が安定し、流通の流れが回復して、国から食料が届くなどの救援体制が整うまでにかかる日数がおおよそ3日といわれているため、最低3日分の防災備蓄準備が必要とされています。あいハート須磨のBCPにおいても、まずは3日間を基準とした計画を立てています。

約30年前には、私たちが施設を運営する神戸エリアで阪神淡路大震災が発生し、甚大な被害をもたらしました。直近では能登半島地震が元日に発生し、いまだに復旧に時間を要しています。

災害が起きた際の備えとして、日頃から準備しておくことが重要です。職員にとって、今回の研修は改めて防災意識を高める機

会になったのではないかと考えています。

あいハート離宮前

日々のケアの向上を目指して

◆介護主任 丸毛 教嗣

昨年度本格的に取り組んだノーリフティングケアも半年に渡る研修を終え、無事に、ひょうごの認定を受ける事が決まりま



した。ひとえに日々の職員の努力の賜物だと思えます。次の目標は3年後に優良モデル施設の認定を受けることです。すでに3年後を見据えてノーリフト委員会ではそれぞれの役割のもと、活動を行っています。

一つ目は技術の習得のための研修です。ノーリフティングケアを続けるとどうしても職員独自のやりやすくなるので委員会のメンバーが毎月少人数の研修を開催し、技術の確認を行っています。まだまだ慣れていない職員も多いのでご入居者様に安心していただくためにも、時には厳しい指導をするなど、妥協せず実施しています。

二つ目はノーリフティングケアに関わる機器の情報収集です。これは昨年度も実施してきましたが、定期的に展示会に職員を派遣して新しい情報を仕入れて、デモ使用につなげていきます。数か月後には新しい機器が出ることもあるので、業者とのつながりを大切にして新しい情報を常に仕入れるようにしています。

三つ目は職員の育成です。現在、ノーリフト委員会は役職者を中心に5名で運営していますが、現状はノーリフティングケアに関わる全職員の育成まで行き届いていません。しかし、職員が一丸となって頑張っていることで、良い方向に向かっていく状況止めないようにするためにも、多くの職員に関わって欲しいと考えています。毎月の研修から次を任せることの出来る職員を見出していきたいと考えています。

ノーリフティングケアを定着させるとい目標のもと、職員が一丸となって取り組んだ結果、他のケアに関しても今まで遠慮していた職員が意見を述べてくれるなど変化が見られるようになりました。一つのケアを皆で取り組むことでチームワークが強化されたと思います。その結果、ご入居者様へのサービス（ケア）の質も少しずつ向上してきていると思います。離宮前の事業計画にもある通り、〃満足を超える感動を与えるサービス〃の実現に向け

て、職員一同で日々邁進していき
たいと思います。



ご支援を
くださった
方々

《4月》

寄付金

八木 一文 様

マッチングギフト

NTT西日本 兵庫支店 様

後援会費

NTT労働組合 西日本本社総支部 様

寄贈品

岡田 美津江 様

(計4件)



大阪市「大阪活躍リーディングカンパニー」の
認証(二つ星)を継続することができました★★

2021年4月に認証を得てから3年。これまでの当法人の取り組みが評価され、同じ「二つ星★★」の認証を継続することが出来ました。今後も女性の活躍に向けた取り組みを更に推進して参ります。

認証企業ページURL▶



120分リハビリダイジェスト映像 ～Instagramリール動画で多数投稿～

脳梗塞リハビリステーション神戸須磨
センター長 伊藤 正憲

脳リハが誇る脳卒中リハの臨床力の高さ。これを多くの方に、ダイレクトに伝えたい。それを叶えるために適しているツールの1つが、Instagramのリール動画です。リハビリテーションの臨床の凄みは、静止画の写真では十分に伝えきれません。実際のリハ場面や、動きの変化をビフォーアフターで見ていただくのが一番です。

常勤スタッフが私ひとりであるため、リハ場面は、自撮りモードのスマホを三脚に固定して撮影しています。120分リハビリが毎日4コマ、約2か月先まで予約が埋まっているため、動画編集と投稿準備は仕事ではなく、休みの日に。大変さはありますが、多くの方に知っていただきたい思いが、私を突き動かします。



投稿して1週間の間に、再生回数が7万回を超えた動画もあり、最近の表現で言うと、いわゆる「バズった」状況ですね。投稿へのコメントもたくさんいただき、嬉しく思います。脳リハの臨床力の高さを、これからも発信していきたいと思えます。

ユーザーネーム「noureha_kobe_suma」でInstagramから検索、
または、誌面のQRコードを読み取っていただき、皆さまもぜひご覧ください。



「皆様の声」受付窓口

全電通近畿社会福祉事業団では、社会福祉法第82条の規定に基づき、利用者家族の皆様等から「苦情」やご意見に適切にお応えするための体制をとっています。面接・電話・書面等のようなかたちでも結構ですので、遠慮なく、お気軽にお申し出ください。

- 愛の家 072-494-0123
- あいハート須磨 078-737-2525
- あいハート離宮前 078-731-2130
- 法人本部 06-6458-5723

【発行】

社会福祉法人 全電通近畿社会福祉事業団
〒553-0003 大阪市福島区福島 3-1-73
TEL 06-6458-5723

Website <https://www.zendentu-kinki.jp>
Facebook <http://www.facebook.com/zendentukinki>
E-mail jigyodan@silver.ocn.ne.jp

【発行人】

理事長 橋本 寿樹

